

中小企業異業種交流会の現状と課題

－人間関係と居心地の良さ－

1. はじめに

今更だが、ウィキペディアで異業種交流会とは何を指すのか調べてみた。

曰く「自らが所属している業種と異なる業種がコミュニケーションを図ったり、提携したり協力する集まり」とされている。

実に分かりやすい定義であり、今存在する異業種交流会はほぼ、この定義の中に収まる活動をしていることであろう。

そうは言っても、実際の異業種交流会の存在は多岐にわたり、その存在目的や規模・社会的立場・年齢層など、分類していけばキリがない。

同時に、そこに参加している人達の目的も同様に千差万別であり、顔を売る、仕事につなげる、新商品を開発するなどよくある目的から、単に酒飲み友達を探しに来たという人まで、これまた分類しきれものではない。

そもそも、異業種交流会ができるには理由があるはずで、ほとんどの会は設立した目的に沿って活動しているはずであるが、それとて永続する保証もなく、時には消えてしまう会もあり、全くもって流動的な集まりであると言えよう。一体いつから発生したのかよくわからない異業種交流会ではあるが、本稿では、あえて私

日進工業株式会社 代表取締役社長 竹元 盛也

の独断と偏見からこのような会の現状と課題について述べたいと思う。

本誌の読者には異業種交流会に参加している方も多と思うが、その方々のご批判も甘受しつつ、好き勝手に話を展開させていただく失礼を先にお詫びしておくものである。

また同時に、話がかなり碎けてしまう可能性もあり、もしかしたら本誌のような格式高い書物には似つかわしくない稿となってしまうかもしれないが、これも併せて先にお詫びしておく。

2. 異業種交流会とは何か

前項で定義づけしたことでなく、なぜそのような集まりができるのか、ということである。これは異業種交流会が存在する地域や規模・目的などが様々であるため、一括りにはできない。

私は昭和37年(1962年)生まれなのだが、小学生の頃、亡き父に幾度か東京湾にハゼ釣りに連れて行ってもらったことがある。そこには怖そうなオジサンたちが沢山おり、でもみんな楽しそうで、私の顔を見て「おいボウズ、何年生だ？そんなやり方じゃ釣れねえぞ」なんて酒臭い顔を近づけてきて説教されたりしていた。

冬になれば忘年会に連れて行ってもらい、またしてもハゼ釣りの時に見た怖そうなオジサン

がいて「おいボウズ、腕が細いな。もっとどんだん食えよ」などと余計なお節介をされていたことを覚えている。

当時はよくわからなかったが、今思えば、これぞ異業種交流会！ではないだろうか。極めて概念的ではあるが、間違いでもなかろう。

また、結局気づいてみれば、今私は時代こそ違え、父と全く同じことをやっている。

私は父の会社を継いだ二代目であるが、何かといえばぶつかり、社内会議のはずがいつの間にか親子喧嘩になってしまい「こんな人間には絶対にならない」などと思っていた時もあったが、本稿の内容に関しては今全くと言っていいほど父と同じことをやっている自分のことを笑ってしまうと同時に、当時を懐かしく思い出す。

父には、後で仏壇に向かって謝っておくことにする。

詳細は後述するが、少なくともこの時代から異業種交流会らしきものがあったのは確かであり、そこにどのような目的があったのか知る由もないものの、根本にあるのは「似たような立場」の人間同士の極めてウエットな付き合いであり、顔だの仕事だの二の次でもあり、しかしそのようなあらゆる関わりりの基盤としての集まりの一つが異業種交流会であったのではないかという想いは、今私自身が関わっている異業種交流会においても、強く感じている側面である。

人間同士の関わりりは必然であり、その関わりり方の在り方の一つが異業種交流会であろうことは間違いではないと確信している。

3. 私の異業種交流会への参加の歴史とその後

本題に入る前に、私の経歴を簡単に紹介しておかないと、私が何者であるのかわからないまま話を進行させてしまいそうである。

先にも述べたとおり、私は昭和37年に東京

に生まれ、大学卒業後に今も取引のある親会社に就職することに「なってしまった」。

私の父は今の私の会社（プラスチック射出成形が生業）の創業者であり、結果として長男である私は跡継ぎ（二代目）候補となるわけで、そんな立場の私に対して父は、いわゆる丁稚奉公的な意味合いなのか、当時は父のあとなど継ぐ気も無く自分で就職活動をし、3社回って3社から内定をもらってそのどこかに就職しようとしていたにも関わらず、半ば無理矢理その親会社に話を通し、それに反発する私に対して最後に、「この城（父の会社）を一緒に守ってこうよ」という父の殺し文句に負けてその親会社に就職することに「なってしまった」という訳である。その親会社を3年で退職し、平成元年（1989年）より当社に就職し、各部門を一通り経験し、現職になって17年ほどが経過している。

本題に戻らせていただく。

本稿のテーマは「中小企業の」異業種交流会であるため、青年会議所やロータリークラブなど大規模な組織についての考察ではない前提であることを、先に断っておく。

私が初めて異業種交流会なるものに参加したのは、当社に入社直後の26歳の時、上記親会社の協力会の中で、二代目の会を作ろうという話が出たのがきっかけで結成された集まりであった。

その親会社は製造業であったため、各社で作っているものが違うという意味では異業種と言えるが、当然ながら同業者もいた。

その会は、下は19歳、上は35歳くらいの非常に若い集団から発足し、二カ月に一度集まって勉強会を行い、親会社にも事務局として参加していただき、年に1～2回の企業訪問や研修旅行（親会社の客先＝エンドユーザーなども含む）も行いつつ、年末は忘年会で羽目を外す、実に真面目な、というより異業種交流会を地で

行く集団であった。親会社からは活動に対して一切の制約は無く、全ての活動はその会で決定し、実行された。

バブル崩壊後からさほど時間が経過していなかった時期ではあるが、上記のような活動は非常に活発に行われており、私自身も副会長として会の運営に携わっていたこともあり、楽しくていつもこの集まりを待っているような状態であった。

そのような中でそれぞれの会員も親しくなっていくと、当然のように「親の悪口」「お客さんの悪口」「今の自分の悩み」……書けばキリが無いが、やはり似たような立場の人間同士であればこそ話せるようなことを、数え切れないほど語り合ったものである。

私にとっての初めての異業種交流会であり、それは全てにおいて実に刺激的であり、厳しく、楽しく、考えさせられ、実社会における生きた勉強ができる、正に人間同士の交流会であったと、今更ながらこの会とそこにいてくれた方々に対して心から感謝する次第である。

ここに至るまで、その会員の会社が倒産したり、会員自身が亡くなったり、メンバー変更や退会、新規加入などありつつ、最終的には親会社の方針で協力会自体が解散し、結果としてこの会も親会社の関連の会という位置づけを外れ、存続の危機に立たされることとなってしまった。

しかしこの会は、形を変えて今でも7社で存続している。今は年に一度くらいしか会わないメンバーになってはいるが、それでも私にとってかけがえのない仲間たちである。

上記の会をAとして、次に参加したのが取引銀行主導で発足した会Bである。

当時私は34歳(1996年)。

これはその銀行が主催していた、後継者を育成する勉強会が契機となり、そこに参加していたメンバーで集まりを作るといふ、名実ともに

二世会と言える会であった。

この会Bはまさに異業種の集まりであり、これまた私にとっては刺激的な集まりであった。

製造業だけの集まりであったAに対し、全く知らない業界の方々の話は実に興味深く、そのような話が今の自分にどれくらい役立っているかわからないが、やはり銀行主導ということで守備範囲が広く、オープンしたばかりのディズニーシーに会として行ったり、自衛隊の総合火力演習に行ったこともあった。

この銀行は毎年後継者育成勉強会を開催しており、勉強会終了後は必ず会Bに入会案内をするという形式をとっていたため、会員数は増える一方であった。

私は二期生であったのだが、この会に所属している間に会員数は三桁に上っていたはずである。

多くの異業種の方々と出会うことができた大変貴重な集まりであり、まだまだ学べるものがあつたものと思うが、個人的に考えることがあり、10年ほどで退会することとなった。

次に、会Bとは少しずれながらほぼ重なる形で参加することとなった会が、会Cである。

これは私の会社がある大田区、つまり行政が主導する形で発足した会である。

大田区による行政主導型の異業種交流会はその数年前から2年に一度のペースで順次発足しており、私が参加した会Cもその中の一つであり、その後もいくつかの会が発足していたものと記憶している。

大田区の行政がそのようなグループ発足を主導していた背景は、根本的には中小企業振興であったと思われる。

大田区は、23区内にあって最も中小企業の数が多く(当時、およそ8000社以上)、日本国内にあって東大阪と一二を争うほどの中小企業の数を誇っていた地域であり、よってそれらの企業の振興を図ることは大田区だけでなく、日

本の経済に大きく貢献できる可能性を信じた上で、その手段の一つとして異業種交流会という組織を選択したのではないだろうか。

また、大義名分としては中小企業振興であるが、具体的には「みんなで集まって何か新しいものを作ろう」というようなコンセプトもあったとも聞いている。

大田区がこのような取組（異業種交流会を継続的に発足させる）にどれくらい力を入れていたかについて、これら発足したグループに対して2年間補助金まで交付していたことから、その重要性を認識していたことが伺い知れる。

私がこの会Cに参加した理由は、上記の会Bで一緒であった同業の社長の紹介があり、当時は社長ではなかった私が、現役の社長のものの考え方を学びたいと思ったため参加したというものであった。

その後この会は、ある物を製作しようという目的に向かったのであるが、会社によってそれに対する貢献度等が異なるわけで、その利害の調整に手間取り、結果的に内部分裂を起し始めてしまっていた。

私自身はこの時点で自分の目的は概ね果たせていたと感じていたため、そのような内輪もめに付き合う気も無くなり、数年で退会させていただくこととなった。

最終的に、この会は解散している。

ただ、他の会の中には今でも存続している会もあり、会として製品化した商品があったり、展示会などに出展したり、積極的に活動を継続しているところもあることは付け加えておく。

私が所属していた会は無くなってしまったが、行政主導でできた会の中にはその目的をある程度は達成できている時点で、行政側としても一つの成功事例として評価できるはずである。

最後に、今現在私が所属し、私にとって最も大切にしたい会である「BBC」という異業種交流会について紹介しておく。

この会は、発足した経緯が上記の会Bと似ており、当時大田区が主催していた「後継者育成セミナー」が終了した後、このままみんなバラバラになったら勿体ないから、何か集まれる会を作ろうよ、という当時のメンバーの一人からの提案がもとになってできた会である。

BBCの発足は1997年、私が35歳の時であった。こう思い出すと、この頃は立て続けに異業種交流会に参加していたことになる。

BBCという言葉の由来であるが、「バックトゥボンクラブ」である。決して「ボンボンクラブ」ではない。会員各位には失礼かもしれないが、いわゆるボンボンなど一人もいない。

創業者や二代目などの立場の人間が自己研鑽を積むための場として発足しているものであり、正にそのような立場の人間が立ち上げた、ごく普通の交流会である。

これも12～3名くらいからスタートした小規模な集まりであったが、脱会や新規加入を繰り返した結果、現在は50名に迫る規模になっている。もしかしたら大田区で一番大きいかもしれない。しかしBBCは、規模の拡大など一切目的にしていらない集団であり、他団体（いわゆる上部団体）に所属することなども無く、全くの独立した集団であるし、新規加入する会員の加入理由のきっかけはほとんどが現会員の紹介である。

発足当初は上記のような立場の人間だけを対象にした会であったが、立場ではなく、自己研鑽は前提として「会費を納めること」「メンバーリストに入っていること」という、かなりゆるい加入資格に変わっていった。

会として毎月定例会はあり、勉強会・家族を招くレクリエーション・ゴルフコンペ・忘年会や研修旅行など、他の会と変わらない活動を行っている団体である。

ある意味、全く特徴が無い上、何の制約も強制もなく、会費も1000円/月でしかない。た

だし、営業目的での加入は不可、というだけである。

私は、これまで新規加入し、今もずっとBBCにいるメンバーに対し、その加入・継続理由を聞いたことはあまりないのだが、これは間違いなく「居心地がいいから」に集約されるのではないかと思っている。

居心地の良さの理由は人によって異なるものであるが、異業種が集まっていれば当然に横のつながりは発生し、仕事をもらったりお願いしたり、個人的に親しくなることももちろんで、しかもそれらのいずれに対してもBBCは一切干渉しないし、むしろ歓迎しているとも言える。私自身も、仕事において会員各社には本当にお世話になり、非常に助けられている。

こんなどこにでもありそうなBBCではあるが、加入資格以外に会員に何も強制・要求しないというような「緩さ」こそが居心地の良さの原点になっているのではないだろうか。

制約や強制があることを否定するつもりは無いし、緩さを肯定するものでもないが、加入者が増えている現実に鑑みる限り、そのようなBBCの在り方に対して賛同している方々が加入してくれているものと考ええる。

BBCも発足して23年が経過し、平均年齢も高くなってくるとやはり、今後についての話題も出てくるわけで、その前提になるのは「会の存続」であり、より若い世代（20～30代）を加入させることによって新しい風を吹き込み活性化させていくことが、存続のポイントとなることを皆理解しているからということになる。

このまま平均年齢が上がっていってしまうと、最後は「老人クラブ」になりかねないし、それは歓迎することではない。

4. 異業種交流会の課題

一口に課題と言っても、会の設立目的や目指

す方向等によってそれは異なったものになるはずで、その答えは多岐にわたるものであろう。

同時に、それぞれの会に参加している人がそこに何を求めるのかによっても、全く違った答えになるはずである。

最終的に、その会の存在意義や課題は会が模索・決定するものではなく、参加者個人が模索・決定し、解決するものではないだろうか。

どのような会であっても、人間関係を構築することができなければそれまでであり、それが全ての基本になっていることは論を待たない。

人間関係があればこそ楽しくもあり、厳しくもあり、刺激的であり、会社が違って苦楽を共にできる、そのような会であれば参加している人はずっとそこに居続けるはずであり、訳あって脱会したとしても、お互いがそれを求める限りそこにあった人間関係が継続することは間違いなく、その意味でそれは「会」とは関係なく続いていくものなのであろう。

私がこれまで参加してきた会は、それが無ければ恐らくはほとんどの人と知り合うことが無かったであろうと考えると、多くの人間関係をもたらせてくれたそれらの会には感謝しかなく、同時にこれからも自己研鑽の場として多くの出会いの場に参加していきたいと考えている。

異業種交流会の課題というテーマの回答にはなっていないかもしれないが、強引にまとめるなら、人間関係の構築の継続、これに尽きると考える。

5. 最後に

私も「守りに入る」歳になりかけているのだが、かといって老け込む歳でもないということで、死ぬまで人間関係の構築に努めることで本稿のまとめとさせていただきます。

異業種交流会の皆さん、一緒に頑張ろう！